

実践的ガイド  
確かな性意識を持つ子どもを  
育てるには

メルビン・ワン博士 著



**JCM**(ジャパНКリエイティブミニストリー)

## 目次

はじめに	1
第一部 入門編	
第一章：赤ちゃんの「こころの誕生」	4
第二章：性同一性のインプリンティング（刷り込み）	
・強い男を演じる男性（過度な男らしさ）	8
・女っぽい男性（未発達の男らしさ）	11
・弱い女を演じる女性（過度な女らしさ）	14
・男っぽい女性（未発達の女らしさ）	16
第二部 幼少期初期の愛着障害	
第三章：性意識の発達障害	
・性同一性のインプリンティング	20
・性同一性障害と同性愛と両性愛	22
・反応性愛着障害	25
・防御的分離	26
・防御的愛着	30
第三部 健全な性意識の発達段階	
第四章：性的自己同一性の発達段階	
・第一段階 誕生～3歳 同性の親への愛着	36
・第二段階 3歳～小学校 同性の友だちとの愛着	41
・第三段階 小学校～中学校 異性の友だちへの興味	57
・第四段階 中学校～高校 異性の友だちへの親しみ	66
・第五段階 高校～大学	
異性の友だちへの性的・社会的な親しみ	73
・第六段階 大学～結婚	
異性への性的・社会的親密な愛着	76
* 監訳者あとがき	78
索引：	80

Copyright©2011 Japanese by JCM

Copyright©2008 by Melvin W Wong

Published by

ARMOUR Publishing Pte Ltd

Kent Ridge Post Office

P.O.Box 1193,Singapore 911107

Email: mail@armourpublishing.com

Website: www.armourpublishing.com

All rights reserved.

No part of this publication may be reproduced,stored in

a retrieval system or transmitted, in any form or by

any means, electronic, mechanical, photocopying,

recording or otherwise, without the prior permission of

the copyright owner.

Printed in Japan

ISBN 978-4-903917-00-9

C0037 ¥900E

## はじめに

今日のように様々な情報があふれる中では、子育て中の親にとって、何を頼りにすれば良いのか分からなくなります。特に性意識の問題である性同一性障害や同性愛については、困難を覚えるかもしれません。欧米では一般的には性同一性障害や同性愛は生まれつきであると信じられています。この問題を性的マイノリティの政治的な人権問題として論議するだけでは不十分です。私はこの問題がすべての人に深く関係があり、特に子育ての基本理念に強く影響を与えると信じています。

私は精神医学の大学教授、大学病院の精神科入院病棟に在籍する心理学者、家族問題を取り扱うクリニックの臨床心理士という経歴を持っています。長年に渡るこれらの働きの中で、私は人の性意識の発達に関わってきました。

今から約30数年前に、私は香港からの留学生としてカリフォルニア大学バークレー校に来ました。そこで家族の願いである地質学者になるために学んでいました。ある日、私は肉体的な痛みよりも、より苦痛でかつ致命的である心の痛みや苦しみが、存在することに気づきました。この心の痛みへの心理的な治療を捜し求める過程で、私は心理学者になるという「使命」が与えられました。当時の私は痛みを癒し、予防する実際的な心理学の方法を学ぶことができると期待していました。しかし心理学を学べば学ぶほど、その考えが間違っていたことに気づきました。人の心の状態は非常に複雑で、単純な答えや簡単な治療は無かったのです。

20年以上も心の痛みを持った人々を援助していく中で、様々な

理由により自分の性的嗜好に問題を持っている不幸な人々に出会いました。彼らはとても深い傷と痛みを苦しんでました。その時点での私の仕事は、彼らの気分が少しでも良くなるように助けることでした。これが彼らの真の解決策になるかどうかは別として。

性的嗜好に苦しむ人々を助けてきた長年の経験から、性意識や性的嗜好が、幼少期の子育てに重大な関係があることに気づきました。この本を書いた目的は、自分の性意識に自信を持つ子どもを育てるための実際的な方法を分かち合うことです。

現在主流になっている考えは「同性を愛するすべての人は自分の性的嗜好を楽しむべきであり、自分の同性愛傾向を直したいというのは、ホモ恐怖症を持っていることだ」(\*1) というものです。しかし私はこの考えに、反対の立場でこの本を書いています。それは親や保育者が子どもの世話をする中で、性意識の発達に良い影響を与える選択肢を子どもに与えてほしいと考えているからです。世話をするだけではなく、子どもに性の同一性を与える役割を担っていただきたいのです。それができるのは彼らだけです。この本が、親、保育者、教育者、教会関係者など、子どもに関わるすべての人への助けとなり、その結果、子どもが性的安定感をもって成長できることを願います。

メルビン・ワン

---

\* 1 : Commentary: Psychiatry and Homosexuality, By Robert L. Spitzer, a professor of Psychiatry at Columbia University. In Wall Street Journal. May 23, 2001. 200. Liberty Street, New York, NY, 10281

## 第一部：入門編



あなたは愛されるために生まれてきました。  
いのちを与えられた神さまは、あなたを愛しています。  
生まれて来てくれて、ありがとう。

## 第一章：赤ちゃんの「こころ」の誕生

赤ちゃんの誕生には、様々な状況があるでしょうが、喜ぶ親がほとんどです。母親は10ヶ月の間、赤ちゃんを宿していたので出産を終えて解放されます。父親は我が子が無事に生まれたことを知り安堵します。欧米では、生まれた子どもの性別は、あまり重要ではありません。何色のベビー服を買うか、どのようなおもちゃを買うかの参考にする程度です。しかしそれ以外の国々では、子どもの性別は重要になります。

例えば、一人っ子政策をしている中国では、子どもを一人しか持てないなら、事実上すべての親が男の子を願うという文化です。その子が男か女かという単純な事実によって運命が決まるのです。つまり長男は家名と家系を継ぐという重要な役割を持ち、家名を高めるために学校へ行き教育を受けることになります。それに対して、娘は結婚すると相手の家に入ると考えます。

文化のことはさておき、子どもが生まれることは親にとって大きな出来事で、様々な準備が必要です。妊娠すると母親は日常的な健康管理や親になるためのラマーズ教室など忙しくなります。そして言うまでもなく赤ちゃんのための服や家具をそろえなければなりません。

出産の時期は、今は具体的に予定日を知ることができ、収縮の回数と子宮の開いている大きさで、あと何時間で生まれるかも分かります。赤ちゃんが生まれると、産声をあげさせ、へその緒を切り、

胎盤を取り除くなどの手順があります。出産は母子共に無事であることが一番の重大事で、安産で母親の身体が楽であれば理想的です。初産の母親はわが子の産声にとっても感激します。

大学院生時代に、マーガレット・マーラー博士(\*2)という名の精神分析家と出会いました。彼女の心理研究に基づいて、赤ちゃんは生れた後、心理的・感情的な自分というもう一つの「誕生」過程を経験しなければならないとする仮説を立てました。子どもは最初の世話をする者（理想的には母親）からの分離の過程を通して、最初の自律の意識を得るという説に私は納得しています。この過程が成功すると、よちよち歩きの幼児は自己の意識を持ち、アイデンティティが、ここから生み出されていきます。心理学ではその過程全体を「分離と個体化」と呼びます。

この「個体化」という考えは、中国伝統文化の中で育てられ、アメリカにきた私の心を捕らえました。アジアでは子どもは大家族文化の中で重要な存在なので、子どもが成長し親から離れることは親不孝となり、してはならないことでした。伝統的な大家族の機能を維持するためには、相互依存の制度が必要なのです。ところが欧米では、子どもが親から離れ自立できるように子どもを訓練します。はじめはどうしてそんなことができるのか、私には理解できず、それをきっかけに大学院で児童心理の研究をはじめました。

---

\* 2：マーガレット・S・マーラー、フレッド・パインズ、アンニ・バーグマンの『赤ちゃんの「心の誕生」、共生と個体化』Margaret S Mahler, Fred Pines and Anni Bergman. The Psychological Birth of the Human Infant, Symbiosis and Individuation.

この「分離と個体化」という過程の中で、どのように子どもの性格や知性が形造られるのか、とても興味を持ちました。これらの微妙な過程は親子の関係が土台であり、この関係が健全であればあるほど、子どもがこれらの段階を通過することが容易になります。その子どもが成人した時、心理的混乱と葛藤が少なくなるものとされています。

大学院卒業後も、この「分離と個体化」について探求を続け、アジア系の患者を助けていく中で、私はますますこの理論の正しさを確信するようになりました。精神科の救急や診療所で私が関わるアジア系のほとんどの男女が、自己の未発達という問題に起因する依存（または共依存）の問題を抱えていました。自我が十分に形成されていないので、低い自尊心と自分を否定する過剰な矯正としての問題を持っていました。そこから発生する心理的問題は、不安神経症、うつ、衝動統制障害(★A)、自殺、依存症、そして乏しい社会的スキルなどです。結婚しても、対人関係の葛藤をどのように解決すればいいのか分からず、配偶者に対する熱い思いが一度冷めてしまうと、どのように愛を取り戻せば良いのか分かりません。どうしたら良い親子関係が持てるのか、家族というものが、どうあるべきかが分かりません。

これは次の世代へと続く悪循環となり、ほとんどの子どもは親の失敗をくり返します。「中国文化は、世代から世代へと悪い連鎖が

---

★A：衝動統制障害：自己や他者に損害を与えるように振る舞う衝動、本能的欲求、誘惑を抑えられないことを特徴とする精神障害。（心理学辞典一丸善）

続く悲劇的な文化(\*3)であり、悲痛な宿命から表れるのは無力感である」と信じている中国人学者がいます。家族の誰もが傷つく悲惨な結末から逃れる出口も手段もなく、この中国文化は呪われているようにさえ見えます。

個人診療や臨床上的の研究、また中国や東南アジアへの旅を通して多くの臨床経験を得た後に、私はやはりマラーの理論は正しいという結論に達しました。子どもにとって「分離と個体化」の健全な過程が、自信に満ちた大人に成長するための鍵です。この過程が赤ちゃんの「こころの誕生」と呼ばれている第二番目の誕生です。



\* 3 : 悲劇的な文化 : Amy Tan, The Joy Luck Club)

## 第2章 性同一性の幼児期の インプリンティング（刻印づけ／刷り込み）

### 強い男を演じる男性（過度な男らしさ）

中国語で「大男人主義（ダーナンレンズーイー）」と呼ぶ現象があります。「過度の男らしさ」という意味ですが、私はこの状態を「強い男を演じる男性」と呼びます。これは男性の自我の過剰矯正の一つです。彼らは「自分が男性である確信」がないので、それを確認するために、典型的な男性らしい振る舞いをして、自分が男であることを強く主張します。これは自分の性に関する不安感を示すしるしです。その時代のモデルとなる男性像の影響を受け、強い男を演じるようになります。このモデルは国民的英雄や有名人、また父親であるかもしれません。

彼らの典型的な行動は、二つに分けられます。精力と様々な形の支配です。男らしさは、ペニス（外性器）によって具体的に確認されるので、これらの男性は自分自身の外性器の機能や大きさを非常に気にします。自分のペニスのことばかり考え、無意識に悪態や毒舌の形でペニスの話題になります。これらの屈辱的な言葉や表現は、男らしくない男性へ向けられています。彼らが少年の頃、女っぽい少年を食べ物にしていじめた、いじめっ子でした。これは彼らの不安を減らす1つの形で、男らしさに自信がない彼らは、女っぽい男の子の存在がとても不愉快に感じるからです。

また強い男を演じる男性は、自分の劣っている男らしさを主張する極端な形として、人を支配しコントロールすることに心が奪われています。彼らは真実の愛を知らず、なぜ愛に自己犠牲と寛容が必要なのかが分かりません。物を用いて気を引き「愛」を見せます。そして自分と同じように弱い女を演じる女性を引き寄せて結婚するでしょう。彼らはお互いが演技をしているために、相手から本当の愛を知る機会を奪っていることを知りません。これは「自己実現された予言」(★B)です。

彼らは人がうらやむ若い女の子とデートしますが、それは相手の魅力に引かれるからではなく、自分を男らしく見せたり、自分の男らしさを証明する飾り物にするためです。夫は自分が弱い男性であることを知られるのを恐れて、感情的に無防備になることができず、妻との親密さを感じるのは性的・肉体的に限られてしまいます。これらの男性と結婚する女性は、自分自身も人間関係が苦手です。夫との絆がうまく結ばれません。この夫婦はお互いの感情的な必要を満たすことができず、互いに不満足で強い絆もなく、お互いが衝突を避けるために自分の興味あるものだけを追い求めるようになります。

これらの夫婦が親になると、子どもの感情的必要を満たすことができません。母であることだけにしがみつき、幸せな結婚生活を送ることを諦めてしまう妻がほとんどです。彼女たちが妻としてのア

---

★B：自己実現された予言：このようになるのではないかといった予期が無意識のうちに予期に適合した行動に人を向かわせ、結果として、予言された状況を現実的に作ってしまうプロセスのこと

イデンティティを回復できないのは、妻の心が育つためには、愛して尊敬してくれる夫が必要だからです。夫も成長過程で自身の男らしさの確信と安定を得ることができなかつたので、妻の必要を満たすことができません。彼らの男らしさは底が浅く表面的で、自分の家族から求められる感情的な要求に答えることができません。ほとんどの男性は、夫や父親としての役割から逃げ出してしまいます。

いつも怒る男性もいます。それは怒りが強さのしるしだと考えているからです。その結果、彼らは自分の愛する者たちから、感情的に孤立し怒り、仕事、ギャンブル、アルコール、ポルノ、薬物の中に、慰めと達成感を見つけます。これらの家族は互いに理解し合う関係を築けません。そしてしばらくは「ままごと遊び」をするかもしれないませんが、夫が中年になる頃、夫、または妻が不倫関係に陥り、これらの家族はバラバラになることが多いのです。彼らがこのような不倫関係に陥る理由は、感情的に満たされない状態に長い間置かれているので、新しく出会った上手な聞き手を自分が愛しているかのように勘違いするからです。この悲劇は、夫婦が離婚するまで続き、子どもは苦しみ続けます。このような両親の否定的な役割のパターンは、子どもが成人しても影響を与え続け、抜け道を見つける人が現れるまで、次の世代へと連鎖します。



## 女っぽい男性（未発達な男らしさ）

強い男を演じる男性が、自分の男らしさに対する不安を過剰に補っている人ならば「未発達な男らしさ」を持つ男性とは、男性性の探求をやめて、男らしくなるための戦いを諦めた人です。彼らは子ども時代のある時点で、意識的、または無意識的に「男らしさを手に入れようとしなさい」と誓ったかも知れません。そのため彼らの本当の男らしさは隠れてしまい、男としての確かさを持つという満足を感じられず、男としての感情的な完全さを手に入れようと必死に努力します。

後で性意識の安定の発達段階の中でもっと詳しく論じることですが、自信をもった男性になるために必要な「こころの誕生」を、これらの幼児は何らかの理由で少年時代も大人になっても完了することができなかったのです。男の子の発達の中で、性の同一性インプリングの段階において(\*4)、彼自身や両親の責任でもなく、何かがうまく機能せず「対象関係」(★C)に置いて「分離と個体化」の過程が失敗したのです。そのような息子は、性意識の安定を得るために、母にしがみつくなか、または母が何らかの理由で、息子にしがみつきます。これは「防御的愛着」の形で「分離と個体化」による喪失と空虚の感情から自分を守る行為です。その結果、息子は過度に母に愛着し、その女性的な性質に非常に親密感を感じるようになります。息子は父親の怒りや激怒に恐怖を覚え、母親の優しさと

\*4：メルビン・ワン博士、「性の同一性インプリングの段階」  
(Melvin W Wong, Gender Identity Imprinting Phase.)

★C：対象関係：幼児期における対象を指し、幼児と母親との内的・心的関係のこと)

受容的な性格を選んだのでしょう。

エリザベス・モベリー氏(\*5)には、父親と息子の間にある上記の過程に関する小著があります。彼女はこの時期の息子について「防御的分離」ということばを造り出しました。防御的分離では、父親が自分に拒絶的であると感じている幼い息子は、父親から逃げることによって、父親から受けた心理的痛みを最小限にするように試みます。防御的とは、自分を苦痛から無意識的に守る心の機能という意味です。この「防御的分離」の理論は、心理療法士が男性同性愛の心理的な起源を明確に説明するのに、過去数十年とても役立ってきました。

性の同一性のインプリングの段階では、父親から男であることは何なのかを、幼児の体験を通して学ぶのですが、それを妨げるのが「防御的分離」です。しかし「防御的分離」は、このインプリング段階を妨げる過程の一部分にすぎないと私は信じています。このことをもっと説明するために、男性性が未発達の子が、どのように女っぽくなるのかを理解することが必要です。



\*5 Elizabeth R Moberly, Homosexuality: A New Christian Ethic.



20年に渡る臨床経験と研究から「防御的分離」が起こるとき、男の子は男として性意識の不安定を埋め合わせるために母親により近づく以外の選択肢がないという仮説を私は立てています。これは「防御的愛着」という過程です。この過剰な愛着は、息子が成長するときに彼が男になるのを妨げるものであると思います。なぜなら、息子が性意識の確信を求める時に、母親と同じで十分だと感じるからです。つまり息子は最初から母親を離れる必要がないのですから、父親に近づく必要もなく、満足を感じているのです。これは幼い息子の性同一性のインプリンティングの段階において発育不全な状態ですが、これがとても抽象的な精神内部に起こる状態であるため、誰も問題が起きていることに気づきません。息子が成長するまで、明らかにならないのです。

DSM-IV(米国精神医学会による精神疾患の診断・統計マニュアル第4版2000年刊行)(\*6)とジョージ・リカーズ博士(\*7)の研究によると、男の子が「性同一性障害」で苦しめることが最初に認知できるのは、平均3歳半です。マラーの「分離と個体化」の発達の段階が、36ヶ月で完了するということから、それは临床上の観察を裏付けるものになります。

---

\* 6 : Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders  
米国精神医学会による精神疾患の診断・

統計マニュアル第4版2000年刊行

\* 7 : Handbook of Child and Adolescent Sexual Problems (Series in Scientific Foundations of Clinical and Counseling Psychology), George Rekers, Lexington Books, April 28, 1995

## 弱い女を演じる女性 (過度な女らしさ)

社会の中に「強い男を演じる男性」がいるとき、勝つことが男性的成功の究極の基準になります。意識的であろうと無意識的であろうと、そういう社会の中の男女は、「勝ち-負け」の考え方に影響を受けます。女性は頭である男性を勝利させようと暗黙のうちに努力します。こういう社会に生きる女性は怒りを持っていますが、それを正す方法がありません。父親、兄弟、夫、または男性上司に至まで、彼らの知性、愛、または憐れみではなく、男性という地位によって女性を支配します。そして女性が大人になる頃には、これを変えられない社会階級制度として疑問を抱くことなく、その価値観に染まっているでしょう。この状況の中で男性は弱い女性の立場を考慮できず、女性は無力さを感じ、それを運命として諦めているのです。

この封建制度は変えることができないと学ぶ時期が、早ければ早いほど、女の子はこの「勝ち-負け」のゲームの中に、自分自身を合わせ、うまく対処することを学びます。結局、この社会の中で女性が平和な居場所を持つために、男性にとって扱いにくい存在にならないことです。支配力と力強さの体裁を保ちたい男性の必要に女性が応えることが、この社会の中で適応していく一番よい方法だと気づくのです。男性は女性が劣っていると見えれば見えるほど、気分がよくなります。それは男性が、自分に関わる女性たちの優しさと受け身の姿勢を通して、力を得るからです。これは人間として不健康な関わり方ではあるものの、女性が騒ぎたてない限り、安定は得られます。これを運命として受け入れた女性は、極端な女性らし

さを演じることを好み、弱さと不健康と引きこもりのパターンを現すようになります。これが「弱い女を演じる女性」で、かたくなな男尊女卑社会の産物です。

強い男を演じる男性は、このような女性に惹きつけられます。それは彼女たちによって、自分が強くなったように感じるからです。強い男を演じる男性は、いつも彼らの下位にいる女性としか、うまく付き合うことができません。そのために社会の中に、女性の無抵抗、依存、愚かさを助長します。この仕組みは、偽りの安定感を生みますが、健全なものではありません。なぜなら、本当の愛の関係においてはいつも、お互いを尊敬し、弱さをさらけ出す対人関係が信頼を生み出すからです。この関係に陥っている男女は、最終的には彼らの結婚と家族関係に満足できないことに気づくのです。この夫婦の間には権力と従順、支配と服従だけがあり、お互いの過ちを告白し赦し合う余地はありません。それは弱さだと考えるからです。

この「勝ち—負け」ゲームによって、家族が動いているときは、家族全員が負けます。なぜなら、自信のない夫を常に勝たせるために、誰かが負けなければならないからです。また愛の関係の中で、この考え方が機能するには、夫が勝つ時、妻は必ず負けなくてはなりません。そして妻が負け、不幸になると、不幸な母になり、不幸な女性となります。それが子育てに影響を与えるということに夫は気づかず、関心もありません。ある意味で、このサイクルは世代から世代へと無意識に続き、夫を含めた全員が負けるのです。

## 男っぽい女性（未発達的女らしさ）

前に述べたように、様々な理由で健康な娘が固定観念的な女性としての機能を拒否するとき、彼女には自分自身の生まれつきの女らしさを拒否するという極端な選択肢しか残されていません。自分が女であることで、不安感を持つかもしれないので、彼女は「自分が女性である」という印象を避けようとします。男のような女性として生きる人は確かにいるものの、「強い男を演じる男性」や「女っぽい男性」ほど、多くはいません。

女の子が自分の女らしさを拒否する理由には、多くの要素がありますが、それらはすべて痛みと恐れに基づいています。女の子は生まれてから5～6歳までの発達の段階で、母親への親しみと親密さに基づいて、自分の性の同一性を形成しますから、彼女が自分の女らしさを拒絶するには、まず母親の女らしさを拒絶しなければなりません。



女の子が母親と結びつかずに、「女性であること」の感覚を形成することは、ほとんどありません。ほとんどの女の子は3～4歳までに、基本的な性の安定感を形成しますが、成長していく中で、母親のようになりたくないと感じ始めます。これは母親があまりにも弱く、受動的であることに、娘が絶望し、この経験が原因になることが一般的です。

例えば、アルコール中毒がありふれたアメリカでは、酒に酔った父親が、母親を言葉や暴力で虐待するのを娘は目撃します。すると、彼女は早くから、自分は無力で孤独という感覚を抱き、無意識のうちに、母親のように「女であることは弱いことだ」と結論付けます。娘の中には「父親のような人とは結婚しない」あるいは「自分は母親のように食べ物にされたり、虐待されない。」と、自分に誓った時を覚えている人もいます。しかし皮肉なことです、後には彼女たちも「蛙の子は蛙」ということに気づくようになるのです。つまり、母親の失敗を繰り返さないことを誓い、両親の機能不全を乗り越えようとするのですが、娘はすでに感情的に母親とつながっているのです、複雑な心理により、父親のような虐待的な男性と結婚するようになるのです。また、このような娘は、あたかも現実を修正できるかのように、自分自身がもっと気分よく、もっと力強く感じられるように、男性のようになることを選ぶかもしれません。しかし残念なことに、自分が軽蔑している男性のように振る舞うことで、自分の気持ちを安定させなければならないことです。男性を避けるために、男の衣服を身につけ、男の髪形をして、男のように歩くのです。

アジアでは、アメリカのようにアルコールと薬物の中毒は一般的ではありませんが、機能不全の家族はアメリカよりも一般的です。アジアでの中毒症状は、捕えにくい隠れた形を取ります。ポルノ（性的描写のある写真や映像）、ギャンブル、株投資のような危険を冒す依存行動、激怒、衝動性、迷信的な考えなどです。強い男を演じる男に、健康な女性の大部分はうんざりします。そして、社会的圧力のもとで密かに男性を軽蔑するようになり、感情的に独り立ちすることを学ぶようになります。過度な女らしさの女性は、無意識に弱い女を演じているのに比べて、未発達な女らしさの女性は、より意識的に自ら選んで女性らしさを抑えて、男っぽく振るまいま

